

ピグルウィグルおばさん

ベティー=マクドナルド作 中山知子訳



933 MacDonald, Betty
(NDC)

ピグルウィグルおばさん

ベティー＝マクドナルド著 中山知子訳

学習研究社

174P 図 23cm (新しい世界の童話シリーズ)

原題・MRS. PIGGLE-WIGGLE

*この本の内容に関する問合せ、製本上のミスなどありましたら、下記あてをお願いします。
文書は東京都太田区上池台4-40-5 (〒145) 学研ユーザー・サービス部「児童図書係」
電話は、東京(03)720-1111(大代表)へ

新しい世界の童話シリーズ

ピグルウィグルおばさん

ベティー＝マクドナルド

訳者 中山知子

発行人 渡部ひろし

編集人 石井和夫

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社石毛製本所

発行所 株式会社学習研究社

東京都大田区上池台四丁目四十番五号
振替東京八一 一四二九三〇

落丁・乱丁本はおとりかえします

©1978

無断複写複製(コピー)を禁ず

5301

Printed in Japan * 定価はカバーに明記してあります。

おばさん イグルおばさん

ベティー＝マクドナルド作

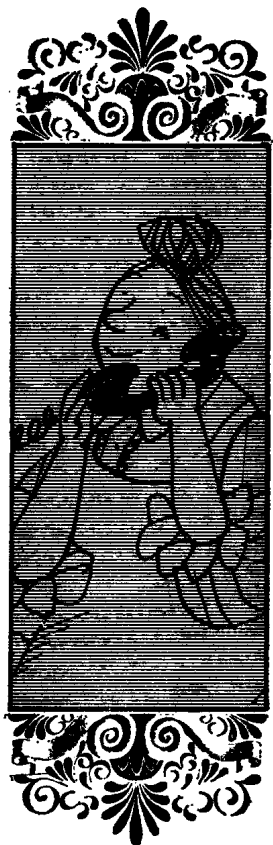
中山知子訳

赤坂三好画

MRS. PIGGLE- WIGGLE



Mrs. Piggle-Wiggle



ピグルウィグルおばさん もくじ

5 ピグルウィグルおばさんは魔法^{まほう}つかい

17 ちらかしヒューバート

36 けちんぼディック

61 どろんこパッチー



152

ずっこけ宝たからさがし

132

ずるやすみジョデイー

115

ぶっこわしシャロン

95

みみずくトリオ

75

ねこっかじりアレン

MRS. PIGGLE-WIGGLE

Betty MacDonald

Original English edition published

by J. B. Lippincott Company

●訳者のご紹介

この本を訳された中山知子先生は、東京に生まれ、日本女子大学を卒業。児童文学の創作および海外児童文学の紹介に活躍されています。

『夜ふけの四人』などの創作のほか、主な訳書に『風と花たば』『秘密の花園』などがあります。

ピグルウィグルおばさんは魔法つかい^{まほう}



「ピグルウィグルさんって？ それ、だれのこと？」

まってました。なんでも、おしえてあげるよ、えへん。

「どんなかつこうしてるの？」

「ふとってるの？ やせてるの？」

「かみの毛は、なに色？」

「かみの毛、長い？」

「ハイヒール、はいてる？」

「子どもは、いるの？」

「ねえ、どんな人？」

ではね。いいかい？

ピグルウィグルさんは、ある小さな町に

すんでいる。とつてもちつちなおばさんで、せなかに、お山やまがあるんだよ。

「そのお山やま中なかに、なにがはいってるの？」

きかれると、おばさんは、へんじする。

「こりゃあ、たいした魔法まほうのいれものでね、これのおかげで、わたしは、魔法まほうつかいにもなれる。小人こびとだの、妖精ようせいにもなれる。たまには、女王じやおうさまにだって、なれるわけさ。」

だから子こどもたちは、きようみしんしん。魔法まほうがつかえるってことは、つまり、つばさがはえてて、空そらをとべるのと、おなじぐらい、べんりだもの。

それと、チパチパ光ひかる茶色ちやいろの目め。かみの毛けは、ながくって、ひざまである。その毛けを、たいていは、頭あたまのてっぺんに、まとめてる。そりゃ、だれかが、とかしてあげようとか、おさげにあんであげようとかいったときは、話はなしがべつだけど。おっとまった。ただまつすぐに、たらしで、てっぺんに宝ほう石せきのかんむりをかぶってるときもあるし、花はなをくつつけてるときもある。

しんせつでやさしいだけじゃない。そばへいくと、なんともいえない、いいにおい。ベ

そつかきだつて、にこつとしちやう。ひよつとすると、やきたてパリパリのクッキーのにおいかもしれないなあ。きてるふくまでパリパリの茶色。

ここほれワンワン、じゃないけど、ワグつて名まえの犬をかつている。ただし、おぼさんの家のうら庭をほつくりかえしてるのは、犬じゃない。近所のわんぱくたちが、おぼさんのうずめた宝を見つけようとおもつて、あなほこだらけにしてるのさ。でも、おもてがわには、花がいっぱい。女の子が、かつてにつんでは、じぶんちの花びんにいけたり、学校の先生にもつてつてあげたり。

こんなわけで、ピグルウィグルさんは、町の子どものことなら、ひとりひとり、くわしいのなんの。でも、その子のおとうさんやおかあさんについては、とんとかんけいがないんだそうだ。おとなとつきあつてると、あたまにきちやうんだそうだ。

そもそも、おぼさんが、この町へきてじぶんの家をたてた、はじめの一年ぐらいは、あいてといったら、犬のワグと、ネコのライトフットと、たったふたり。だから、とてもさびしかった。

ところが、ある雨の夕がた、ワグとライトフットにお茶をごちそうしてやろうと、クッキーをやいていたら、まどの外を、だれだかこつちへやってくる。大きなスウィツケースをひきずって。おや、なきながらくる。女の子だ。

けど、そんなこと、どうでもいい。そうだ。あの子を、お茶によんでやろう。なんてつたって、お客さまですからね。お婆さんは、がぜん、はりきつちやつた。こなだらけの手を、きれいにふいて、雨の中へかけだしていくと、そのお客さまをつかまえた。ようこそ、どうぞ、と、家へつれてきた。

まるぽちやの、女の子だ。名まえは？ メアリールー。年は？ 八才。どうしてないてるの？ だって、わたし、家出しちやつたんだもん。

ともかくも、これだけわかった。ただし、女の子がへんじをしたのは、紅茶を三ばいのんで、クッキーを七まいたべて、それからあとのことだった。

メアリールーが、いうことに、

「家出しちやつたんだわ。だって、さらあらいなんで、だいつきらいだもん。さら、さら、



さら！ うー、やんなっちゃう。あらって、ふいて、かたづけ。朝あさから晩ばんまで、そればかり。まるで、さらあらいロボットだよ。つまりさ、ママったら、あたいのこと、だいきらいなしょうこだわ。ほんとのママじゃないみたい。し、せ、つにやるよりしんせつだなんて、おなさけのつもりなんだわ。」

そういつて、またなきだした。おかげさまで、八まいめのクッキー、たべかけの半はんかけが、べしよべしよだ。

「ほんとのママじゃないだって？」

そんなことはないはずだ、と、くびをかしげながら、おぼさんがきいたら、へんじは、こうだ。

「だってさ、そうでなきや、さら、さら、さら！ なんて、いいっこないわよ！」

「そりやまた、へんなりくつだね。さら、さら、さらっときたら、このわたしなら、大おおよろこびだね。まったくのはなし話、さらあらいつてのは、ゆかいなしごとといったところで、この家いえでは、一ぺんごはんをたべるたび、さらの数かずなんてしれたもの。ほれ、ワグのとら

イトフットのと、わたしのと、せいぜい五、六まいで、わけないけどね。

ところであんた、きいてるね？ わたしがさらをあらうとき、じつは、ちょいとしたつもりごっこ、やるのさ。おほん。

わたしは、きれいな王女^{おうじよ}さま。金色^{きんいろ}のかみの毛^けは、ふさふさ長^{なが}くって、ほつぺたはリング、目はワスレナグサの水色^{みずいろ}だね。おや、あんたのかみは黒^{くろ}くって、おさげはちゃんぽりブタのしっぽ。でも、そんなことかんけいなし。

とにかく、わたしは王女^{おうじよ}さま。魔法^{まほう}にかかって、ひとりぼっち。それで、おさらを一まいあらうたびに、すこしずつ魔法^{まほう}がとけていく。いいかね。時計^{とけい}がボーンとなるまえに、一まいのこらずかたづける。でね、台所^{だいどころ}じゆう見^みまわして、もしも、パンくずひとつかけらちらかっていようもんなら、さあたいへん。魔法^{まほう}つかいが、もう一年^{ねん}、いじわる魔法^{まほう}でしばっちまって、いじめられるのさ。おおいやだ。」

ピグルウィグルお婆^{おば}さんは、ひよいとうしろをむいて、柱時計^{はしらどけい}を見て、とびあがった。

「ひやつ、とんでもない。あんた、四時^じまで、あと十分^{ぶん}しかありやしない。さあ王女^{おうじよ}さま、

てんてこまいだよ。早く、早く、早く、早く！」

とたんに、メアリールームも、とびあがった。うっかり、つられちゃったのだ。さうだの茶わんだの、ながしへはこぶ。それを、おばさんが、ジャジャツとあらう。ふきんでふくのはメアリのしごと。そのまに、おばさん、あっちへこっちへ、ちょこまか。ぞうきんがけをやりながら、ひそひそ声で、

「ちよつと、王女さま、きこえますかね？」

ほうれ、魔法つかいの、つえの音だろ？」

メアリは、どきどき。ブタのしつぽが、ぴくぴくおどる。耳まで、びーんと立って



くる。

「ほうらね、こっちへ、やってくる。」

たちまち、台所^{だいどころ}は、ぴかぴかするつる。パンくず一つのこさずに、そこらじゅうきれいになっちやった。

気がついてみたら、メアリールは、しらずしらずの大^{だい}サービス。ネコのしつぽをとかして、ついでに、犬^{いぬ}のせなかも、なでてやった。

ちょうど時計^{とけい}がなるまえに、ピグルウィグルおばさんが、にこにこ、わらった。

「たすかったねえ、王女^{おうじよ}さま。これで、なんにも、こわいことないさ。あんたは自由^{じゆう}になれるってもんだわさ。」

こういって、二階^{かい}へかけあがり、またすぐおりてきた。黒^{くろ}いとながりぼうしをかぶって、年^{とし}より魔女^{まじよ}のふくをきて、ひよろ長^{なが}いつえをついていた。でも、ぼうしの下^{した}で光^{ひか}る目^めは、とても、おばさんの目^めとはおもえなかった。ほんとの、いじわる魔法^{まほう}つかいが、なべだの、さらだの、すかしてみたり、なんとも、こまかい、あらさがし。さびたちょうつがいみた

いな音をたてて、ぎくしゃく、ひざをついてゆかをなでたとき、メアリは、こわくつてこわくつて、むちゆうで、ストーブのうしろへ。

そのとき、黒いお婆さんは、もったいぶって、かぎをさしだした。台所のドアのかぎだった。

「王女よ、そなたは自由であるぞ。魔法はとかれたわけではないが、なにもおそれることはない。」

魔法つかいは、そういつて、かいだんをのぼって、かえっていった。とおもったら、ピグルウィグルさんがおりてきた。

「どうだね？ おもしろかったかね？」

「ええ、ピグルウィグルさん。こんなの、はじめて。」

「そうかい、よかった。それならば、つぎはもっともつと、おもしろくなるよ。おさがらどんとふえりゃあ、ゆかいも百ばい。やれやれ、それにしても、この家に、どっさり、おさがらがあつたらねえ。」

